

妖夢はそばの樹によじ登って、上のほうの枝にくくりつけてあつた風呂敷包みを取つて降りてきた。学校へ向かう途中で置いてきたもので、中身はタオルと、弁当だった。妖夢はその場で服を脱ぎだすと、水溜りに足を踏み込んだ。火照つた身体が急速に熱を奪われていく。見上げると、滝の上にお地藏様があつて、妖夢はそれを拝んだ。

滝つぼはそれほど深くなく、妖夢の脚がすつぽりおさまるほどだった。ほどよい強さで打ち付ける天然のシャワーが、汗や土をさらつていく。

身を清めた妖夢はタオルで身体を拭いて、それから弁当を食べ始めた。大きい岩に腰掛けて、おむすびを包んだ笹の葉を開く。一陣の風が吹き抜けて、湿り気を残した妖夢の短い髪を吹き上げた。少女は少しも意に介さずに、髪を乱れさせたまま手にした米を頬張つた。緩やかな滝のざわめきだけが聞こえる陽だまりの中を、しかし妖夢はなお、その穏やかならぬ瞳を光らせていた。

食べ終わると、妖夢は岩に腰掛けたまま眼を閉じた。休んでいるようでもあつたが、視線を逸せずとも剣呑な、張り詰めた気配はその身を満遍なく包んでいた。少女のいでたちは、常に一振りの刀そのものであつた。それは、半人半霊である妖夢の人間側が、感情を多く表現できない制約を課されているためであつた。しかしそれは絶無というわけではない。

そこには一切のねじれの無い、ただひとつの決意が迸っているのだつた。それが魂魄妖夢という少女の持つただひとつのもので、他のものは自ずから斬り捨てているのだ。半霊など、感情の気質など、彼女にとつては老廃物にも等しい。余計なものが身体に付属しないというのは、シンプルで、理想的な有様だつた——彼女にとつては。

眼を見開く。

刹那、妖夢の手が、己の背後に漂う霊気を斬つた。幽霊はそれをかわそうとのけぞつたが、それはあまりに遅すぎた。霊気がまつぶたつに分かたれる。

——だが、それは一瞬で元通りになった。

己自身にさえ気取られぬ速さで、それを斬るということは容易いのに——斬つても斬れぬ、その因縁を妖夢は呪つた。

その瞬間においてのみ妖夢の眼光はいささかぶれてはいたが、無論彼女自身に自覚はなかつた。

妖夢は岩から飛び降りると、その場を去つた。

西行寺の私有地から離れて、県道を跨いでまた別の山道に分け入っていく。相変わらずの獣道であるが、背の高い樹木はほとんどなく、日差しが直接照りつけてくる。その代わりに風を遮るものもなく、強く吹き抜けて、妖夢の肌を爽やかに撫でていく。

曲がりくねつた道を進み、なだらかな斜面を登っていく。気づけば陽は妖夢の背にあつた。西の空は突き抜けるような青空だったが、東には分厚い雲がところどころに散見された。影に向けて歩んでいるような心持になる。ふと、遙か麓の街並みが眼に入ってくる。それはうつつすらと、黄金色に輝いていた。

振り向けば、太陽は既に稜線にその一部を埋めて

いた。黄金の直線は直視しがたいきらめきを存分に解き放つていて、それを背負う山々は真つ黒な影でしかしかなかった。

妖夢はそこでしばし立ち止まつた。

周囲に、他の生き物の気配は無い。

否。

天が茜に染まり、尾根に影が満ちていくと共に、そこには、生き生きとした野生でない、不浄の気配が現れた。それは瘴気だった。

逢魔が時。

妖夢は改めて、己の他に人の気配がないか探つた。

ここには獣さえ近づかない。鳥すらその上空を避けて飛ぶ。ましてや人間がわざわざ分け入るはずもない——だが、鈍感な人間は気配を察してそれを避けることが出来ぬ。山の生き物としての常識を知らない人間が通りかかれば、すぐにそれと知れる。

妖夢は耳を澄まして、山の空気を聞き続ける。

耳や眼で感じることの出来る、形而下の存在物の気配とは別に、だんだんと満ちてくる得体の知れぬものがあった。重圧。だんだんと大きく、包むように膨張してくるそれが妖夢の肌に脂汗を滲ませた。

それ以上、その場にいることが——気が進まなくなってくる。軽い違和感が、だんだんと身体をうずかして、やがては、危機回避の本能を刺激しだした。それが警鐘ほどの勢いに達してはじめて、妖夢は眼を開いた。

すぐ眼前に異形があつた。——いや、それは何の変哲もない人の形をしていた。

「人の子一人、通らなかつたかしら？」

八雲紫。

妖夢と同じ人間で、妖夢と同じ少女で、妖夢と同じ五体満足で。半分幽霊である妖夢のほうが、形としては異形だつた。しかし、半身の違いなどまるで些細と思えるほどに、その女は異常だつた。感情のない身体を、この時ほどありがたく思うことはない。

妖夢は眼光をもつてして紫を刺した。

のみならず、彼女に斬りかかり、殴りかかり、蹴りかかり、ぶつかり——あらゆる攻撃をもつてして八雲紫に襲い掛かる自己を何度となく想像した。

しかしそれは、結末に至る前に打ち切られるのだつた。空想の上ですら、計り知れぬ暗闇には妖夢のいかなる技も歯が立たない、という現実以外の解が見出せなかつた。それが八雲紫という虚無だつた。虚無——否、彼女は足りないわけではなかつた。

むしろ、満ち足りすぎていた。その無明は、ありとあらゆるものによつて塗りつぶされたための暗黒なのだ。どれほどの現実を、妄実を重ねれば形もわからぬほどに滲む色を見せることが出来るのか。

「あとは私が見ているから、もう帰りなさい」

八雲紫はそう言つて、それ以上妖夢にかける言葉はないかのように、すれ違い、何処かへ行つてしまおうとした。

しかしその刃からは、依然として眼光が放たれる。